# ICT 海外ボランティア会会報

## No. 25　（旧、NTTOBSV 会会報）

2011 年 6 月 8 日（水）

Home page　：http://sv.nttob.org/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆巻頭言
地デジ日本方式の南米普及に思う
本会顧問・ ＮＥＣビッグローブ(株)社長　飯塚　久夫氏
◆ 現地たより
教えるということ
カンボディア･プレアコソマ専門学院
SV 松田紀久夫　氏
◆ボランティア活動紹介
「シニアボランティア活動を活かす会」について（１）
「ＳＶ経験を活かす会」(前)理事長
角井信行　氏
「シニアボランティア活動を活かす会」について（２）
「ＳＶ経験を活かす会」(前)副理事長
野口　蒸治　氏
◆ お知らせ
当会ホームページの１時休止など
事務局
◆ 本誌読者プラザ
ただいま米作りに挑戦中
古河電気工業㈱　関西支社
西日本通信営業部　岩名　孝夫　氏
◆ 本会入会者リレー寄稿（番外編）
東日本災害問わず語り
カンボディアＳＶ０３‘トンガＳＶ０６’
村上　勝臣　氏
◆ＪＩＣＡ「メールマガジン配信登録」のおすすめ
事務局

**巻頭言**

# 地デジ日本方式の南米普及に思う

本会顧問・NEC ビッグローブ（株）社長
飯塚　久夫

本題に入る前に、私こと、このたび僭越ながら当会の顧問を拝命いただき、誠に光栄なことと恐縮している次第です。

私は、４０年間のＮＴＴグループ生活の中でも、海外の駐在経験もなく、国際と言えば、１９９９年のＮＴＴ再編前、いわばＮＴＴ一体時代最後の資材調達部長兼国際調達室長をやって、１９８１年制定の日米調達協定の廃止交渉を総務省、外務省とともに行った立場です。遡ると、４０年前の若い頃は海外からの技術研修で電電公社を訪れる人たちへの講義、３０年ほど前から資材調達・国際調達の仕事で“貿易摩擦”にも関わり、９０年代は“マルチメディア構想”のもと米国西海岸シリコン・バレーの各社に通い詰めました。

以上のような立場から８０年代の日本メーカーの世界飛躍、そしてその後の海外での凋落を見てきて、昨今は感無量の思いひとしおのこの頃です。情報通信国際交流会にて、当会の加藤隆さんを始めとして各社諸先輩方がいかに国際活動についても戦略的かつ実践的な活躍をなさってきて、今日でもその本質を維持されているかを伺い、改めて今のＮＴＴが、メーカーが、さらには日本が取り戻して欲しいことがあることを歯がゆく思っているところでもあります。

自己紹介はこのくらいにして、テーマに入ります。ご存知かと思いますが、日本では本年７月にテレビのアナログ放送が停波となります（除東北地方）。そのデジタル放送日本方式はＩＳＤＢ－Ｔという国際標準にもなっています。

ＮＴＴ（コミュニケーションズ）は日本のテレビ放送開始以来その全国中継ネットワークによる伝送と交換業務（いわゆるＭＡＳＣＯＴシステム）を請負っているのもご案内のところでしょう。このサービスは当然ながらテレビの一コマ落ちも許されない、すなわち全国津々浦々で何があっても（外部要因による伝送路断でも装置故障でも）３０分の１秒以内（テレビは１秒３０コマ）に回復させる、さらに言い換えると、視聴者には一切故障が分からないようにするという極めてミッション・クリティカルなものです。

私はＮＴＴコム時代このテレビ中継ネットワークのデジタル化プロジェクトの責任を途中から引継ぎ、言葉で語り尽くせないほど多くの困難な課題もありましたが、ＭＡＳＣＯＴなどで苦労と成功をなさってきた諸先輩方のサポートもあり、無事仕上げることが出来ました。ほぼ５年前のことです。ＮＨＫ、民放、全国約２００放送局を結ぶネットワークのデジタル化がすべて終わって、その後、地方局自営部分のデジタル化も進み、今日、ファイナル・ステージを迎えているわけです。

一方、この地デジ日本方式は、日本の技術がグローバルに普及しなくなった昨今にあって、めずらしくも世界１１カ国が採用を決めてくれています。といっても、フィリピンを除くと、

そのすべては中南米で、特に南米はコロンビア以外はすべて日本方式になりました。その決定過程は、総務省を始め電波産業会やメーカーなど日本の関係者が大いなる努力をしたことは言うまでもありませんが、特に総務省の技術系で初めての総務審議官（Vice Minister）寺崎明氏（現在は野村総研理事）の活躍はめざましいものでした。彼は２年間に２４回も南米を訪れ、日本方式のメリットをアピールしました。それは端的には移動放送への柔軟な対応（日本でいうワン・セグ放送）ということです。もちろんそうした技術的・サービス的な優位性のみでなく、人的な関わりの大切さを極めて有効に打ち立てました。

実は、私もその人的な面で多少貢献しました。特にまずブラジルが日本方式に決めてくれた（２００６年）後、しばらく話が進まなかったのですが、ある日、寺崎さんから『飯塚さんは確かアルゼンチンにいろいろ知己がいますよね。ちょっと一緒に行ってくれませんか？』との依頼がありました。それは私の趣味（アルゼンチン・タンゴ）の関係なのですが、仕事も４０年経ちましたが、趣味の方は５０年で、若い頃からの知人が、（どこに国でもあることですが）歳をとると、それなりのポストについて、現在アルゼンチンの大統領府や大臣クラスになっていました。そこで、直接の交渉当事者ではなくても、いわば外堀を埋めるという意味で、私も喜んで協力しました。というのは、ブラジルに次いでアルゼンチンが日本方式に決めてくれれば、他の南米諸国は全部なびくのではと、私は確信していたからです。しかも、放送というのは技術だけではなく、その国の文化にも関わることですので、当事者だけではなく、メディア大臣や文化担当の国会議員なども寺崎氏と一緒にあるいは私単独で回ったりしました。

それがどこまで貢献したかは定かでありませんが、結果としては２００９年８月にアルゼンチンが日本方式に決めてくれた後（実際はその直前にペルーが決めてくれましたが）、案の定、あっという間にすべての国が日本方式になりました。当時既に欧州方式に決めていたウルグァイまでその後（２０１０年）日本方式に変更するということにもなりました。

ところで、ここで、決してこうした私のささやかな貢献の自慢をしたいのではありません。さらにその後、実に残念なことが起きているということを申し上げたいのです。それは、私が寺崎さんと同行している最中にも、彼にブラジルの大臣から呼び出しが来たりして、クレーム的なことが起きていたのです。要は、ブラジルが折角日本方式に決め、南米全部に広がれば、４億人マーケットが開けるのに、日本メーカーの誰一人として肝心の端末を南米で出してくれないではないかというクレームでした。もちろん、南米で端末を出そうとすると１００ドル程度でないとということはありました。日本のように複雑な機能は不要だから、通話機能とワンセグ視聴だけが出来ればいいのだということです。でも、端末は日本では５万円とかですから、日本メーカーは二の足を踏んだのでしょう。そうこうしているうちに、韓国のサムソンがブラジルを席巻し、ＬＧも加わってアルゼンチンで出したときには３００ドル近い端末になっていました。それでも日本メーカは誰も動かない！（現在では日本のＳ社が動いているとの話はありますが...）

日本は何故、何時からこういう国になってしまったのだろうと私なりに考えることになりました。その詳細をここでは述べませんが、乱暴に言うと、この２５年間、日本の情報通信業界で起きてきた「競争の不条理性」を感じます。また、一件飛躍するようでもありますが、

今回の大震災にあたって、某紙に冨山和彦という人が書いている下記の言葉と符合させて考えざるを得ません。

- エリート層の資質の問題…危機に直面しているのに、決めるべきことが決められない。判断することを避ける。「上と相談する」「県から要請が来ていない」「用件に該当しない」そんな反応ばかり…保身とメンツと責任転嫁。
- 私たちはこういう「リスクを取れない、判断できない」人たちを「エリート」として政と官と民のリーダー層に据えている。その結果、この国は頭から腐っているんじゃないか。そんな実感があります。

上記の「競争の不条理性」というのは、はっきり言って、ＮＴＴとソフトバンクとの競争のやり方のことです。ここでは、さらにこれ以上申し上げませんが、少なくとも、ＳＶ会の諸先輩の方々が最初の現役で活躍されていた頃には、日本の国際競争・協調はもう少しマシだったと確信している私としては、いずれいつか『この１０年、日本の情報通信産業の活気を殺いだ元凶は誰だったのか？』と問う歴史の断罪が下される日が来るだろう！と申し上げて、誠に中途半端なところですが、今回はここまでとさせていただきます。

今後ともご指導・ご鞭撻の程、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

## 現地たより

### 教えるということ

プレアコソマ専門学院
SV　松田紀久夫

１．簡単な職場紹介

ボランティアとしての職場は労働省管轄のプレアコソマ専門学院で、フランスの援助で１９６５年に創設された。職業訓練校から始まり、ポルポト政権による混乱はあったものの、経済活動の発展による時代の要請により、今は学士コース充実に重点が置かれている。工学系は土木、電子、電気の３学科があり、それぞれにシニアボランティアが派遣されている。文科系学科も同程度あるがボランティアの配置はない。学生数は高校を含め約４０００名で夜間部もある。

学園祭で

２．教えるということ

学生に「教える」は二通りあると思う。一つは mouth で理論を、もう一つは hand で技術を、換言すれば教壇に立ち

伝えたいことを声に出し教える、実習で手を動かし教えると言える。カンボジアに来て早い時期に言葉の壁を思い知った。既にパソコンのマウスの壁もあった。
当初、安易に、時間さえかければ相手が異国人でも何とかなるのではないか？と思っていた。しかし、現実は甘くなかった。カンボジアの教師は時間教師と言えるのではと思っている。自分の担当する授業に来校し、授業が終われば帰宅する。学校内に自室は無いし、自分の所属する学科の教員室も狭い。グループ教員全員がようやく椅子に座れるスペースしかない。給料が非常に安く、他で収入を得なければ生活が出来ないのが主な原因と思うが、突然の休講、授業が遅く始まる事は多々ある。そのような訳で教師が来校しない時に、学生に授業を依頼された。いつも授業内容を把握するため、教室の最後列で聴講しているからだ。学生の学びの要求に応えるべく挑戦した。相手のレベルを想像し、教える内容を整理し、ある方針に沿って、出発点から目標の到達点に向けスタートして行く。たとえ満足のいく会話でなくても、英語、クメール語の単語を並べ、図や表、それにジェスチャーを加えれば、曲がりなりにも推進出来ると思っていた。進む道は高速道路、国道、県道などを行く場合と同様に、テーマの難易度、自分の持っている量により、乗る自動車と通過する道の選択をする。しかし、説明不足や想定外のことで、質問により枝道に入ることになる。枝道からさらに細い枝道へと、どんどん本線から外れ、最後には自分のポジションが分からなくなり、修正不能という迷子状態の経験をした。間違いなく貴重な経験であった。考えが甘かったと言えばそれまでだが、何事も経験してみないと分からない。つまずいたけれど、まだ転んではいない。分かった事は、言葉は教える道具であるということ。理論ではメインとなる道具であり、技術ではサブとなる道具である。日本国内ではみんなが日本語を話すのは当たり前である。当たり前である故、言葉が教える道具であると全く気付かなかった。メインの道具が無ければ行き詰まり、二進も三進も行かなくなるのは当然と言える。サブの場合は、これが無ければ自ら相手に手本を示す、ヒントを与えるなどで曲がりなりにも進むことが可能である。学校では「技術は実習で！」となるが、通信は特異分野なので学校に設備、測定器類はない。また、土曜日に通信の授業が多くある。教師が部外講師で民間会社に勤務しているからである。そんな訳で週６日勤務し、毎週水曜日にテレコムカンボジア（日本のＮＴＴに相当）に行き、社員と一緒に現場作業をしている。まだ、学校では自分の持っているもの（たいしてないが）を懐に仕舞い込んで出せていない。何とかして少しでも学生達に見せれるよう、学校でなくテレコムカンボジアでの実習に備えている。教えるのに言葉が必要と分かり、言葉の壁はエベレスト山のように高かった。

バーベキュー大会

# シニアボランティア活動の紹介

## 「シニアボランティア経験を活かす会」活動について（１）

シニアボランティア経験を活かす会
(前)理事長　角井信行

心ならずも、ぎすぎすと言い争い、がつがつと奪い合うことの多かった現役時代を後にして、人生のホームストレッチを歩む年代となったシニア世代が、JICA シニア海外ボランティアとして、貧しさからの脱却に手を貸すつもりで発展途上国に出掛けたものの、貧しくとも明るく生きる純朴な現地の人々に心打たれて帰国し、再度社会に役立つ活動に参加して人生の締め括りとしたい・・・そんな気持を実現する場を提供するのが、我が「シニアボランティア経験を活かす会」であります。「活かす会」は、2004 年 1 月設立、2005 年 11 月に NPO 法人となり、現在 150 名ほどの会員数です。JICA が紹介してくれた活動を海外でこなして来た会員の職種・資格・特技は千差万別、活動地域こそ、東京都・神奈川県・埼玉県が中心ですが、昨年度の活動実績を一瞥しても次のようなものがあります。

JICA 関連：

シニアボランティア募集に関わる協力

募集説明会会場でのパネリスト・よろず相談員としての協力（春・秋 2 回）

応募希望者を対象とした相談会開催（春・秋 2 回）

シニアボランティア赴任中のサポート

留守家族連絡会（1 回）

シニアボランティア帰国受け入れ協力

帰国時オリエンテーション（3 回）

帰国報告会（3 回）

JICA 各種イベントへの参加

グローバルフェスタ、協力隊まつり、地球ひろば「SV に聞く」、横浜国際フェスタ、よこはま国際フォーラム、等での展示・講演・ワークショップ

自治体関連事業：

杉並区・新宿区等に於ける国際理解教育、外国籍児童・生徒に対する日本語学習支援、外国籍保護者に対する学校連絡文書翻訳・通訳

出前授業：

小学校・中学校・高等学校・大学・社会人向けの授業・講義、延べ 40 コマ強（「総合的な学習の時間」対応及びその延長線上として）

シニアボランティア体験発表会：

JICA 横浜を会場に会員が毎月実施

過去 4 年余の発表内容を冊子に纏めて出版（33 カ国、44 名分、53 題）

これらの活動に参加した会員の延べ人数は昨年度 850 人ほどになります。

活動に参加する会員はシニアボランティア経験者（日本人）ばかりでなく、東南アジア・中近東・中南米出身の留学生をも含み、留学生の持つ各国語能力及びそのお国振りを大いに活用してもらうと同時に、活動に対しては少額ながら謝金を支払うことにより、留学生の経済面にも寄与しています。

2011JICA 横浜フォーラムプレゼンテーション

活動資金の源泉は、会員の年会費・寄付金、JICA・自治体からの事業支援費、受益団体からの謝金がその主たるものです。

活動の開拓・立案・実施のため、東京・横浜両地において、週 1 回の打合せ会を開き、有志の会員の協力の下、透明性を持って民主的に運営しているのも我が会の特徴です。

志を高く持ち、他を賤しめず、和やかな気持ちで、意義ある活動を求め、誰が何時来ても至福の時を過ごすことができる、そんな楽しい会を場として、社会のお役に立てれば上々と考えています。

追記

今回の東日本大震災は、従来の社会通念を根本的に見直さねばならなくなるような一撃でありました。既成概念としてのお仕着せのフェールセーフやバックアップが如何におざなりなものであったか、また、考えられる限りのフェールセーフとバックアップが具備していたにしても、それらで対抗できない事態が起きた時に、どのように対応すべきであるかを、きっちりと議論し認識しておかなかったばかりに、対策が後手後手にまわり、天災が人災に転換してしまったような様相となったことが、東京電力福島原発事故をはじめとする、今回の諸現象が与えてくれたレッスンであったと思います。

大震災の復旧・復興のために、我が会も何らかのお役に立ちたいと考え、その方策を探っていますが、根本的見直しの精神をその中に反映させて行くべきと考えています。

2011 年 5 月

# 「シニアボランティア経験を活かす会」活動について（２）

シニアボランティア経験を活かす会
(前)副理事長　野口蒸冶

１．はじめに

ＮＰＯ「シニアボランティア経験を活かす会」の副理事長を務めております野口烝治と申します。このたび貴会より、私共の会の紹介をさせて頂く機会を頂き有難うございます。

貴会からはこれまでも「ＩＣＴ海外ボランティア会会報」をお送り頂き、これを通じて貴会が活発な活動を展開されているご様子や国際的に幅広く活躍された方々の記事に、敬意をもって読ませて頂いております。

２．組織概要

ＮＰＯ「シニアボランティア経験を活かす会」は、ＪＩＣＡシニア海外ボランティア制度および日系社会シニアボランティア制度で、開発途上国へ技術指導ほかの活動のため派遣され、活動を終わり帰国されたＯＢ／ＯＧが、帰国後にこの体験を活かして社会貢献をしようと集まった首都圏在住者が中心で出来た団体です。2004 年に任意団体として設立、2005 年ＮＰＯとして東京都港区に事務所を置き東京都の認証を得ました。現在会員は首都圏在住者（東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城）を中心に 150 名（2011 年 3 月末現在）になりました。

会員の約半数が神奈川県在住者であり、またＪＩＣＡ横浜から事務所スペースの提供をして頂けた事から、神奈川県での活動のため神奈川分科会をＪＩＣＡ横浜のなかに置いています。

３．主な活動

会の主な活動は、ＪＩＣＡとの連携で、シニアボランティアの募集や啓蒙の活動をするほか、新たに派遣されるシニアボランティアや海外で活動するシニアボランティアやその留守家族へのサポートなどを行っています。また各種国際フェスティバルなどの催しへの参加のほか、シニアボランティアの開発途上国での活動の経験を活かして教育現場への国際理解やキャリア教育への支援として出前講座などを

パラグアイ農業指導のプレゼンテーション（2011.04.20）

行っています。

その主なものとして新宿区教育委員会や杉並区教育財団との共同事業による各種出前講座や、外国籍児童・生徒を大勢抱えている学校への外国籍児童・生徒への日本語支援、翻訳などを行っています。

神奈川分科会では、神奈川県で行われる各種の国際フェスタや学校現場への出前講座のほか、毎月第３水曜日にシニア海外ボタンティアとして開発途上国で活動してきた体験を、“シニアの挑戦―国際協力の現場を語る”と言う体験発表会をＪＩＣＡ横浜を会場として開催しています。そのチラシを添付しますので、お時間の許す方は是非のお越しをお待ちします。

今後とも「ＮＰＯシニアボランティア経験を活かす会」をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

## お知らせ

事務局

### 鈴木弘道氏一時帰国

トンガ王国活躍中の SV 鈴木弘道氏が、5 月 13 日に一時帰国されました。氏は同国通信省の政策アドバイザーとして、同国電子政府構築等の提案をおります。本件に関しては当会の派遣中ボランテイア支援をする「ICT サポート活動」として組織的に支援しており、氏は帰国中も支援グループとともに関係機関と打ち合わせを重ねるなど精力的に活動されました。当会としては実りある成果が得られるよう、引き続き支援をいたします。

### 石井誠一氏ＳＶ派遣

本会会員　石井誠一氏（元ＮＴＴコムニケーション）が、今秋（９月末～１０月初）にＳＶとして中米パナマで活躍されることとなりました。指導課目は「通信網整備」で、配属局所は「パナマ国家警察通信局」です。要請内容は、「パナマ国家警察無線系の自営網の保守・運用に関わる指導・助言」ということです。氏のご活躍をお祈りいたします。

### 須山勝彦氏帰国

本会会員　須山勝彦氏（元富士通）がＳＶとして活躍されたカンボジャから、去る 2 月に帰国されました。活躍の様子は「現地だより」として本誌で紹介していただきました。今後はいままで、ネパール・マレーシアでのＳＶ経験も活かされて、ＳＶ経験を活かす会の理事として活躍されます。

### 当会がクロスロード誌で紹介

JICA 発行の国際ボランティア情報誌「クロスロード増刊号（２０１１）」において、当会が帰国後も活躍するシニア海外ボランテイアとして紹介されました。特に「ICT サポート活動」として、「教育や医療など ICT を活用した問題解決に取り組む SV や隊員がスムーズの活動できるように、技術的・管理的な課題に対し、側面からサポートするもの」として紹介

されております。

JTEC 国際人材登録の募集について

JTEC 様より次の連絡をいただきました。

「団塊の世代の大量退職期にあり、まだまだ現役で活躍したいとお考えの方々も多くいらっしゃいます。JTEC では、海外での活動に関心のある方に、ご活躍いただける場を提供し、条件が合えば私どもと一緒にこれらの国・地域の電気通信・放送・ICT の発展のために海外プロジェクトに参画いただきたく、人材登録を実施することといたしました。」

詳細は JTEC のホームページ　http://www.jtec.or.jp/ をご覧下さい。

当会ホームページの一時中止

現在当会ホームページは何者かに攻撃を受けて使用不能になっております。山崎広報部長が鋭意修復に取り組んでおりますので、近く修復しますが、その間皆様に迷惑をおかけします。ご了承ください。

## 本誌読者プラザ

### ただいま米作りに挑戦中

古河電気工業㈱　関西支社
情報通信カンパニー
西日本通信営業部　岩名　孝夫

古河電工　岩名孝夫です。

ＩＣＴ海外ボランティア会会報号外を送付していただきありがとうございます。

見ているとわくわくしますが、初めての海外の仕事だったフィリピンの SMART Communications から 1997 年 7 月に帰国以来、高齢の父親に代わり先祖代々耕してきた、田圃で自分自身で米を作ろうと決意し米作りをはじめました。

ここ数年何とか一人で作れるようになり、なぜか奈良市の東部山間地域でも気候があうのか「秋田小町」と「一目ぼれ」を五反(50a)あまり作っています。

毎年ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｳｨｰｸは田植えでつぶれます。今年は幸い長男(写真)が手伝ってくれました。

私の地区でも、私の同年代の次の担い手がいなく、もし何とか息子が百姓やってくれたら海外に出て行けるのかなと、思っております。

田植えのあとは、畦や土手の草刈がほぼ毎週刈り入れの始まる夏の終わりまで続きます。

大事なことは、夢を捨てないことですね。

フィリピン時代、公私わたりお世話になった田嶋氏(現田嶋 要 衆議院議員)が「年をとったら土に近いところで暮らすのが最高ですよ」とよく言っていました。当時若いのに、古いこと言うなと思っていましたが、最近身にしみて理解できるようになりました。

P.S.昨日 15 年ほど使った田植え機が、作業中に壊れ、急遽購入しましたが、一年間に取れる米を全て売っても、買えません、これが日本の小規模農家の現実です。
チョッと悲しくなります。（２０１１．５．２）

トラクターで地ならしを

長男が田植えを、まっすぐ植えるのが難しい
このあとしばらくして、壊れた！

5 年使ったヤンマーの田植え機が壊れ、
急遽田圃まで持ってきてもらったクボタ製

チャオプラヤ川河畔にて

## 本会入会者リレー寄稿（ 番外編）

### 東日本震災問わず語り

ＳＶカンボディア０３‘
トンガ０６’村上勝臣

１．はじめに

東日本震災に関しては、３月１１日の地震発生以来、来襲した津波の映像や、東京電力

福島原子力発電所事故の模様は連日、現在でもテレビ、ラジオ、新聞等で報じられているので、経緯などについては今更解説がましく状況説明する余地はありません。したがって、私は今回与えられた機会に宮沢賢治「雨ニモマケズ」の中の「デクノボウ」と呼ばれるような、平凡な災害地域の住民として震災の経験、感想を報告しょうと思います。

２．北上川――津波は５０ｋｍ遡った

津波の陸地伝播は仙台空港を襲った映像で明らかだ。
地表を這う波は抵抗が大きく進行が遅れ表面の波が地表を覆うように伝播するようだ。
然し川を逆流する津波は地表の抵抗がないので事情が違うという。
先日、ＮＨＫの取材班が北上川の河口である石巻から津波の遡上調査をした結果がインターネットで報じられていた。
地上のような伝播抵抗はないので河口から５０ｋｍまで遡上したという。
これは、岩手県境に近い地点であるということだ。
私は血液型Ｂのせいで物理的分析しょうという心はないが標高差にしては相当の地点まで押し寄せることを証拠付けているのは確かだ。
途中で北上川堤防を越えて氾濫し河川沿いの農地に多大な影響を与えたという。
これらは、大きな災害を受けた地域のニュースに隠れ報道はされていない。
津波の恐ろしさはいろいろな場所で牙を剥いている。(2011.04.20)

3.震災見舞い

５月１日午前１０時半、小学校同級生の嫁ぎ先の家が被災し、避難所生活をしている見舞いへ誘われるまま参加した。被災者を含め合計５人が集まった。場所は岩沼市、ＪＲ東北線と、常磐線の分岐駅で芭蕉が「奥の細道」の旅で立ち寄った阿武隈の松のある街である。集合場所は被災者の避難所近くの岩沼駅駅側の地元のスーパーマーケットであった。

１）被災者、予想外の元気

午前１０時半、面々は店内の小さなコーヒー店で昨年１月秋保温泉でのクラス会以来の再会であった。

「意外と明るいんじゃない。かっこいいカーデガンを着ていて。避難したとき着ていたの」とＥ子。「見舞いに来てくれた友達から貰ったの。チョッと若作りだけど。今夫と、娘の子供と４人で避難所生活、命からがらの避難所生活だけれど、私たちだけじゃないと思うと、そう落ち込んでいられないからね。みんなと会って涙流して見せたところで、何の得にもならないしね」と被災者本人。

「さすが、太陽の陽子ちゃんだね」と私。「Ｋ（私のこと）チャンはいつもオベンチャラが直ぐ出る」とＮ子が冷やかした。実際、私は被災者の陽子の異常な明るさに驚かされての発言であった。

避難所の公会堂へ行っても仕方ないでしょうと陽子本人の発言もあり一同は、被災現場を見舞うことにした。

２） 家屋全壊の赤紙

５人は近くの蕎麦屋で災害時の模様を話しながら昼食をしてＳの車に便乗し被災した陽子の家へ向かった。現地は岩沼市役所から車で実に１０分足らずの場所であった。今回の「津波災害の境目は道路が境目である」とニュースで報じられてきたが今回私は自分の目で検証した感じだった。

陽子の家南側から

彼女の家は、仙台西道路と呼ばれる常磐自動車道に接続される仙台市から南に延びる高速道路の海側２００ｍの所に位置していた。海岸から直線２ｋｍほどの距離である。

西道路の下を通過すると情景は一変していた。車が田圃の中に置かれているのが 4,5 台目にはいった。「これでも７割方整理した後なの。初めて避難先から我家を見に行った震災翌日はビックリした。多くの車が田の中に散らかっていた」と陽子が説明した。「おい、墓石が田圃に寝転んでいる。凄い力だねえ」とＳがゆっくり走りながら言う。「我家の墓も整理しないといけないと思うけど未だ手付かず」と陽子。

陽子の家東海側から

彼女の家に着くと、２階建ての大きな家は残っていたが、すでに「赤紙」が張られていた。意味は全壊を表すもので彼女の説明によれば撤去しても承諾すると言う意味だそうである。

海沿いに南北に走る道を挟んで人家は南向きに並んでいた。彼女宅前は公民館であった。「後ろ隣のお爺さんは当日１人で留守をしていたが津波にさらわれて死亡たの」と陽子が淡々と語った。

廃墟と化した荒れた洋子宅の庭先に駐車し半時ほど、３人の女性群と別れ私とＳは界隈を徘徊した。つい彼女の家の５０ｍ先で自衛隊の重機が全壊した家の取り片づけをしていた。殆どの家は家の外形を留めているが、ひどく損壊し素人目にも修理不可能と映った。ところどころに農機具が散乱していた。

「殆どの農機具に査定して引き取ると仙台の農機具店の紙が張られているがおそらく、ちり紙交換以下の値段だろうな」とかって、デパートの外販営業をやっていたしＳが説明する。

３０分後、５人は彼女の「全壊」の赤い張り紙された家の前に集まった。

「陽子の家の１階に侵入しているコンバインはうちの奴？」とＳが言うと「いや、あれは他所の物が流れてきたの。うちコンバイン何処へ流されて行ったものやら。土蔵にしても土台の証拠が残っているだけ」と陽子はそれと判る土台を示した。

１０００坪ほどの広い庭に、苗床や、土蔵があったというが、土蔵は土台だけを残して全く跡形もなく、苗床もどこかへ流されていた。

３）救助隊に関する巷の評価

午後３時、一同は集合場所のスーパーマーケットへ引き返し、朝集まったコーヒーショップにいた。

陽子宅の震災模様を話した後、当地域で見た災害救助隊の活躍が話題になった。「矢張り自衛隊の活躍だねえ。私の親戚の息子が自衛隊にいるからじゃないけど。とにかく、質素で行動は早くきっちりとやる自衛隊は見直したわね」とＮ子が真っ先に口火を切る。概ね全員同意した。

「わが富谷町隣に大和駐屯地がある。震災１週間後、食べ物調達に大和町に行ったら、災害復旧の自衛隊の車が頻繁に出入りしていたね。運動公園に遠来の自衛隊が大きなテントを張ってキャンプしていた。自給生活をしていたね。一斉に朝出発し、夕暮れに隊列組んで引き上げてくる。多分東松島市辺りの救援に出かけるのだろうね」と私。

「そう。消防は地元だから良いとして自衛隊と全く対照的なのが警察だ。私の友人の秋保温泉旅館女将の旅館に応援警察が宿泊しているんだそうだけど、毎晩酒やら、ご馳走を要望するんだそうよ。応援に来ているのか判らないと、女将が私に電話で話していたわ」とＮ子は駄目を押した。「自前で飲んだり食ったりするんだろうからある程度勝手じゃない」と私は弁護した。２時間ばかり話し込んで再会を約して分かれた。

４．フェールセーフ（むすびに替えて）

『全ては時間が解決する』というのが私の現在まで学んだ天災を含めた歴史上の事変に関する持論です。

今回の東日本震災についても１世紀も過ぎればそんな評価だろうと思います。その中で私は現在までの史上経験ないのが福島原発事故だと感じています。チェルノブイリ、スリーマイル島の事故が示すように、解決までに長く尾を引くだろうと思います。

私は原子力利用についは、海外生活を経験するにつけ「資源のない日本には必要なエネルギー源である」と信じてきました、しかし今回の事故で再考の必要に迫られました。そこでいろいろな専門家の述べる意見も聴取してきました。

ＮＨＫ小野文恵アナウンサー司会の「ニュース深読み」じゃなく「原子力発電関係ニュースつまみ読み」と言ったところでしょうか。

私は十数年『Nikkei BPNews Mail』の配信を受けて「拾い読み」をしてきました。そんな中震災後、東大の宮田秀明教授が原発事故について語っている記事を見つけました。

曰く「原発事故は「科学」の問題ではなく「技術」の問題である。私はずっと技術者だ。科学と技術の違いは大きい。中でもいちばん大きいことは「技術は人間に対して責任を持つ」ということだ。だから、人間に対して責任を持つ義務の少ない科学者と責任を持つことを義務づけられている技術者との差異は大きい」と。

彼の説明では全ての事象に関してサービスを提供する場合、技術者は「フエールセーフ」

を検討しなければならない。つまり如何なる理由にしても提供している、或いは提供しょうとするそのサービス機能が停止した場合、利用者の安全を確保するための検討を十分行うのフェールセーフだという。例として、日本の新幹線がサービス開始後死者を出していない例をあげていました。

原子力発電については「フェイルセーフ」の検討の未完成を今回の事故は露呈したと述べています。

彼は主張しています、「当初設計したＧＥ技術者の「フェイルセーフ」の設計検討が甘かったのだろう。原子力発電の「フェイルセーフ」を確保するとなると私は専門家ではないが相当投資が強いられると思う。故に原子力発電はペイしないかもしれない」と。

彼は、『リチュウム蓄電池の技術改善でその製造コストの低下が期待できるので、時系列的に不安定な太陽光発電、風力発電など自然エネルギー利用発電は近々コストが下がるのでペイするだろう』と述べていました。

宮田理論は大きな糧としてさておき、現実の私は、今震災の最大の被害者が出た地域住民として、７月以降災害ボランティア参加を考え、釘を踏んだ場合に耐えられる靴の検討とか、粉塵に備えマスクのはめ方の練習をしているところです。(2011.05.30)

## JICA「メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入

- (http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

## 会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

**編集後記**

・巻頭言に 飯塚久夫様 からご寄稿をいただきました。中南米における日本方式地デジ及に尽力された氏のご奮闘等を紹介いただきました。それを通して、“何とかしなくては“との氏の思いと信念が伝わってまいります。産業界のリーダーのお一人として、ご活躍・ご指導を今後ともお願いするところであります。

・シニア海外ボランティア活動報告 として、ご執筆時に理事長及び副理事長をされておられた角井信行氏及び野口蒸治氏にご寄稿いただきました。ＳＶ経験者はＳＶ活動終了後も社会貢献として様々な活動をされておりますが、その代表例として素晴らしい活動かと思っております。私も入会されていただいており、日頃楽しくもあり大きな刺激をいただいております。

なお、野口氏より提供されております「シニアの挑戦－国際協力の現場を語る」のパンフレットはホームページで紹介させていただきます。

（以上 加藤）

・カンボジアＳＶ松田さんから、寄稿いただきました。私は自分が勤務した７年前のカンボジアと比較して、公務員の待遇は当時と状況が変わっていないのに驚きました。先生職を務める松田さんと比べると私は仕事に関しては英語でＯＫだったので言葉では幸いだったと感じています。

・本会機関紙の読者のコーナーとして、今回初めて古河電工の岩名さんから寄稿していただきました。皆さんの寄稿を宜しくお願いします。

・本会の活動とは関係ありませんが、未曾有の災害ということで、東日本震災に関して拙文を掲載させてもらいました。今回の震災はわが家族に、わが町内会に、わが町に、わが県にいろいろな教訓を与えたと感じています。将来機会がありましたら、「その後」について報告したいと思います。

（以上　村上）

総編集長　：ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会　事務局長　加藤　隆
編集長　：ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会　報道部長　村上勝臣
発行　：ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会
**メール**：sv@info.nttob.org